

『武漢コンフィデンシャル』（手嶋龍一著）を読んでみた。

著者は、NHKに入局し、政治部に異動し、外務省・首相官邸・自由民主党などを担当する。1987年、ワシントン支局に赴任。1995年から1997年までボン支局長、1997年から**8年間**ワシントン支局長を務める。2001年9月11日の米国同時多発テロ事件では、11日間にわたる24時間連続の中継放送を担当。2006年、拉致や偽札といった北の独裁国家の問題をめぐる情報戦を描いた『ウルトラ・ダラー』（新潮社）を発表。2010年、姉妹篇となる『スギハラ・ダラー』（新潮社）を出版。国際情勢に詳しいジャーナリストである。

小説の舞台となる武漢にはなじみがある。Severe acute respiratory syndrome (SARS) が流行った翌年に、長女が武漢大学に留学（SARS蔓延で1年間延期させられた）し、その年に家族全員で訪問したことを思い出す。武漢市は長江中流域の中心都市であり、長江とその支流である漢江の合流点にある武昌・漢陽・漢口の三鎮からなり、「江城」という異称もある。武漢は3800年の歴史をもつ国家歴史文化名城で楚文化の発祥地の一つである。三国志の戦場となった赤壁が有名。2019年末に新型コロナ・ウイルスが市内で発生、同ウイルスによる肺炎が大流行し、翌2020年1月23日に武漢市全体が（中国政府によって）ロックダウン）された。

本書は、新型コロナ・ウイルスとスパイの活躍を絡めた内容になっている。書き進める時代内容が前後するため、多少読みにくいところもあるが、内容は非常に興味深く、どこまでが事実でどこからがフィクションなのか、浅学の私には識別できない。

前作『鳴かずにカッコウ』（日本の公安調査庁に入った漫画オタク青年が、中国、北朝鮮、ウクライナの諜報網に足を踏み入れていくストーリー）でも活躍した英国秘密情報部員が主役。東アジア政局の香港に居を構えて米国の友人と手を携えて、21世紀の国際社会を揺るがせる新型コロナ・ウイルス誕生にまつわる謎に挑む。米国情報機関の中でも最も小さな情報組織、NCMI（国家医療情報センター）に移籍し、この新しい職場で未曾有のバイオ情報戦に遭遇することになる。米国の研究機関と「習近平の中国」が指導する武漢のウイルス研究所との関係も暴かれている。

美しい娼妓の孫と稀代の名品”汝窯の皿”。一見何の脈絡もないように見えるこれらの出来事が、長江が支流を集めて一挙に大海に注ぐように、終盤に至って急展開を見せる。雲南地区の麻薬密売組織についての推測も興味深い。

小説というよりドキュメンタリーを読んでいるようで、手嶋龍一氏の作品は要注目である。